

石敢當の由来(下)

(財)沖縄協会会長 小玉 正任



『姓源珠璣』の汚名をすすぐ

ところが江戸後期寛政十二年(一八〇〇)に『桂林漫録』が出版され、その中に『姓源珠璣』の引用として五代晋の勇士名を石敢當とし、彼を石敢當碑の起源と書かれた。漫録は碩学桂川中良の著で当時ベストセラーとなり、五代晋の勇士説は今日に至るまで辞典類に孫引きされている。実はこの引用文は明の徐燾著『徐氏筆精』(一六三三年成る)の引く『姓源珠璣』の文章の丸写しである。現在、石敢當の研究者の間では、五代晋の勇士説の発信源は『姓源珠璣』であり、非はあけて同書にありとされている。しかしこのことに疑をもった私は、『姓源珠璣』の原文に当たることにした。同書は明の楊慎民の撰、四三三年ころ成書苦心惨憺、ようやく萬曆庚子(一六〇〇年)刊行の新刻『姓源珠璣』を見つけた。同書では、五代晋の勇士名は、石敢」となっていて、石敢當碑の由来の記述は一切ない。しかもこの記事は『資治通鑑』を参考にしたとある。徐燾も萬曆の人、同書を見る機会はあるはず。にも拘らず何故に原文にはない『石敢當』、そして由来話を付加して引用文としたのか、全く理解し難いことである。ともあれ、『姓源珠璣』の汚名はいわれなきもの、非は『徐氏筆精』、『桂林漫録』

にある。幕末以来今日まで、『姓源珠璣』の原文に当たって論文を書いている者は寡聞にして知らない。なお、わが国の民俗学者は石敢當の由来に関し、石のもつ呪力に着目している。

函館市の石敢當



わが国最北端の石敢當 北海道函館市にある。昭和六十二年造立。高さ六五cmの黒みがけ(南アフリカ原産)。持主の大石圭一は北大名誉教授(昆布の権威)、昭和六十二年、講演を頼まれて沖縄にきて、那覇市内の石材店でこれを購入し、自宅の庭に立てた。字形は首里金城町の石敢當と同じ。

金城町の石敢當



那覇市首里金城町石畳道の入口の左側にある石敢當。九cmの丁ヒ石砂岩。

JR 川崎駅前の石敢當



高さ七二cmの黒みがけに、高さ二二cm幅五二cmの沖縄県宮古島産のトラバーチン(石灰岩)の石敢當がはめこまれている。これは、昭和四十一年台風で被害を受けた宮古島に川崎市民が救援活動をした返礼として宮古島民から贈られたもの。昭和四十五年に造立されたが、駅前の再開発に伴い、昭和六十年に現在地に再建された。沖縄との文化交流の絆となること、また交通安全を祈るものとされている。

石敢當の現況

現在、わが国の二十八都道府県に石敢當がある。沖縄県二万基以上、鹿児島県約二〇〇基、宮崎県約九十基、大分県基、長崎県二基、佐賀県七基、愛媛県二基、徳島県十二基、山口県基、広島県二基、岡山県二基、兵庫県五基、大阪府十一基、和歌山県二基、奈良県基、京都府二基、滋賀県基、長野県三基、静岡県一基、神奈川県四基、東京都十基、千葉県一基、埼玉県二基、宮城県二基、山形県一基、秋田県二十八基、青森県四基

北海道基

造立年銘のあるわが国最古のものは、宮崎県えびの市にある元禄二年(一六八九年)造立の石敢當(同市指定民俗文化財)で、次に古いものは沖縄県具志川村(久米島)にある雍正十一年(一七三三年)造立の泰山石敢當(同村指定民俗文化財)。わが国最北端の石敢當は北海道函館市にあり、昭和六十二年(一九八七年)造立。

最も丈が高いのは、徳島県三加茂町の石敢當で百八十センチある。これは文久二年(一八六二年)、悪病が流行し、大火や水難が続いたので集落のはずれの鬼門に立てた。同町指定民俗文化財。全国でただつ県指定の民俗文化財になっているのは、山形県鶴岡市にある石敢當。造立年は不明なるも、汚損著しく、祠堂の中にある。明治の始め、鬼県令の異名のあつた三島通庸も、この石敢當をはばかり道路計画を変更したといいうわく付きのもの。他にも「丁ク」な石敢當がいくつもある。詳しくは拙著『石敢當』を御覧あれ。

